

ポイント11 優れた言葉使いが生むもの

重要な“てにをは”の役目

日本語の特徴の第一は、何と云っても“てにをは”にあります。

“てにをは”を持つ日本語は、語順

をどう変えても文意が通じます。「僕は君に本を贈る」を「君に本を僕は贈る」とも、「本を君に僕は贈る」とも、「君に僕は本を贈る」とも、「本を僕は君に贈る」とも言えます。このようにどんなに語順を変えても、その意味は決して紛れません。この点、中国語や欧米諸語は言葉の順序が一定していて、語順を変えたら意味が通じません。こういうことが日本人の融通性に富む性格を作っているのではないかと思われま

す。

第二の特徴は、敬語法です。同じ意味(概念)の言葉に尊敬語と謙讓語とあって、相手の身分や親近の度合によってこれを使い分けている、ということです。

例えば、“食べる”は前者では“召し上る”、後者では“頂く”と使い分け、“言う”は、“仰しゃる”“申す”、“行く”は、“行らっしゃる”“参る”

と使い分けます。

このように言葉を正しく使い分けるためには、もちろん、言葉についての知識が必要ですが、それ以上に、相手の気持を尊重し、良い関係を保持するために、言葉を使い分けるのだという配慮が大切です。豊かな心は、豊かな言葉で養い育てるしかありません。外国にな

コラム **部首** 竹

稲穂にもみがついている形の象形字。

【築】 筑と木の形声字。地固めに丸太で“木づく”こと。筑は木でつく音を表したもの。転じて“家”などを“建てる”こと。

【簡】 竹と間の形声字。間(カン)は刊の意味である。竹を割って削り干してこれに漆で書いた。“竹ふだ”が本義。転じて“書物”または“手紙”のこと。